

「同情するなら愛をくれ」 ルカ7：36～50

## I 導入部

おはようございます。11月の第四日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に礼拝をささげることができますことを感謝致します。

今日は収穫感謝礼拝として礼拝をささげています。第二礼拝は、教会学校の幼少科の子どもたちとの合同礼拝となっています。

今日は、収穫感謝の礼拝としてささげています。私たちは、感謝の気持ちを果物や野菜をささげるといふ行為を通して感謝を神様に現わしているのです。

感謝の気持ちを見える形で現わす。ですから、感謝の気持ちが多ければ多いほど、感謝のささげものの数なのか、質のよさなのかは別にして、より多く、より質の良いもの、値段の高いものをささげたいと願うのではないのでしょうか。

私たちは、今日は感謝の気持ちをもって礼拝していますが、それは、収穫感謝の時だけではなくて、毎週の礼拝で神様に対する感謝をささげることが大切な事だと思うのです。

私たちは、何に対して感謝するのか。それは、神様が私たちになしてくださったみ業、十字架と復活、福音の故、神様の愛と恵みのゆえに感謝するのです。

今日は、ルカによる福音書7章36節から50節を通して、「同情するなら愛をくれ」という題でお話しします。

## II 本論部

### 一、誰の招待にもイエス様は答えられます

ファリサイ派の人がイエス様を食事に招待しました。普通、食事に招待するのは、仲の良い人、自分にとって食事をしたいと願う人を食事に招待します。聖書を見てみると、イエス様とファリサイ派の人々とは敵対関係、意見の対立する関係、与党と野党のような関係でした。ルカによる福音書5章においては、レビ、つまり徴税人マタイがイエス様に召されて、その喜びを自分の仲間の者たちを呼んでパーティーを開いた記事があります。

イエス様がマタイの仲間の徴税人や罪人と食事をしている所をファリサイ派の人々とその派の律法学者たちはつぶやき弟子たちに言いました。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか」(ルカ5:30)と。これは一つの例ですが、ファリサイ派の人々は徴税人や罪人を忌み嫌いましたが、徴税人や罪人と共に食事をするイエス様や弟子たちをも嫌ったのです。それが、ファリサイ派の人々です。

けれども、このイエス様を食事に招待したシモンという人物は、他のファリサイ派の人々とは何か違った考えを持っていたのでしょうか。当時のユダヤ人は、偉大な人や良き教師を招いて食事をして議論するというような習慣を持っていたようです。自分の家に、その

ような偉い人や時の人を招くことが榮譽な事であり、そのような議論を一般の人々にも公開していたようです。当時の時の人、言葉には権威があり、その驚くべき業績は、奇跡の数々は、ファリサイ派の人々や律法学者、一般の人々には大きな影響を与えていたことでしょう。その時の人を読んで、話を聞きたいと願ったのではないのでしょうか。もう一つの思いは、本当にイエス様が権威ある者なのか、神様から遣わされた人物なのかを吟味するためというのもあったのかも知れません。

イエス様というお方は、愛をもって喜んで招待する人も、何かの企てをもって招待する人も分け隔てなく、招待を受け入れ、交わることをなされたのです。私が17年前に、青葉台教会に来ました時、信徒の皆さんのご家庭を訪問したことがありました。皆さんの事を知ることとお交わりすることが目的でした。あれから随分と新しい方々も増えましたので、また、ご家庭を訪問する機会があたえられたらと願っています。喜んで迎えて下さる方も、何かのたくらみをもって迎えて下さる方でも喜んで訪問させていただきますので、お声をかけて下さい。

## 二、イエス様は、人の心をごらんになられます

ファリサイ派シモンの家に招待されてイエス様は出かけられました。その時、その交わりの中に、ある人が登場します。聖書は、その人を「この町に罪深い女がいた。」と紹介しています。リビングバイブルには、「この女は売春婦でした。」とはっきり書かれています。

詳訳聖書には、「格別に悪い罪びと」とありました。罪人の中でも格別に悪い者というのですから、とんでもない罪人なのです。口語聖書には、「罪の女であったもの」と説明しています。罪の女であったが、今は違うということでしょう。

まあ、人を紹介するのに最悪の紹介の仕方です。そして、その女性が食事の席に着いたイエス様の所に来たというのです。38節を共に読みましょう。「後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。」リビングバイブルには、「女は部屋に入るなり、イエスのうしろにひざまずき、さめざめと泣きました。あまり泣いたので、イエスの足が涙でぬれるほどでした。女はていねいに髪で涙をぬぐい、心を込めて足にくちづけしてから、その上に香油を注ぎかけました。」とあります。

リビングバイブルには、彼女の心からの、精一杯の思いをイエス様に現わしている様子がうかがえます。素晴らしい光景です。絵になるシーンです。ほほえましい光景です。けれども、この光景、彼女の精一杯の思いを理解しないばかりか、見下す、ファリサイ派のシモンの思いが記されています。39節を共に読みましょう。「イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人かわかるはずだ。罪深い女なのに」と思った。」

詳訳聖書には、「イエスを招待したパリサイびとがそれを見て、心の中で言った、「この人がもし預言者なら、自分にさわっているのはだれか、どんな女か、わかるはずだ。この女は有名な罪びと（社会ののけ者、罪に身をゆだねきった者）」なのだから。」とあります。

リビングバイブルには、「イエスを招待したパリサイ人は、この出来事を見て、「これで、

やつが預言者でないことが、はっきりしたぞ。もしほんとうに、神様から遣わされた方なら、この女の正体がわかるはずだからな」とひそかに思いました。」とあります。

シモンは、彼女のイエス様に対する行為ではなくて、彼女自身の罪人ということの問題にしました。ですから、罪人とレッテルを貼られた人は、人のためにどんな良い事をして、困っている人を助けても、罪人だからということの問題にされるのです。では、私たちは、どうなのでしょう。罪があるということで全てが帳消しにされるのでしょうか。

イエス様は、このシモンがひそかに思ったことをご存知でした。そして、あるたとえ話をするのです。

### 三、私もあなたも多くのことを赦されています

ある金貸しから二人の人がお金を借りました。一人は50万円、もう一人は500万円借りました。二人とも借りたお金を返すことができませんでした。お金を貸した人は、両方の借金、50万円と500万円を帳消しにしたというのです。イエス様はシモンに尋ねました。「二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」と。リビングバイブルには、「この二人のうちどちらがよけいに、貸主に感謝し、彼を愛しただろうか。」とあります。シモンは答えました。「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います。」と。

口語訳や新改訳、詳訳聖書では、「多くゆるしてもらったほう」とあります。当然、50万円よりも500万円借りていた方が感謝する気持ちが多いでしょう。

イエス様は、この女性の方を振り向いて、シモンに言うのです。「この人を見ないか。」と。そして、彼女がイエス様に対して何をしてくれたのか、シモンと比べて語ります。

シモンが足を洗う水をくれなかったことに対して、彼女は自分の涙でイエス様の足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐってくれたこと、シモンがイエス様に接吻してくれなかったことに対して、彼女がイエス様の足を接吻してやまなかったこと、シモンがイエス様の頭にオリーブ油を塗ってくれなかったことに対して、彼女が足に香油を塗ってくれたことを語られたのです。シモンは家の主人として、客を招待する一般の歓迎の行為を何一つしなかったのです。イエス様に対する思いが、そこに現れていたのです。それに比べて、彼女の愛とまごころと感謝の思いが、その行為に現わされていたのです。

シモンは、彼女の心からの、精一杯の、まごころからの行為を見ないで、自分がイエス様にしなかったことを棚に上げて、彼女の罪人としての問題、ファリサイ派の人々がいつもしているように、自分たちの名ばかりの正しさを表に出して、自分の罪の性質や問題を棚に上げて、他人の罪を指摘して、人々をさげすみ、攻撃し、さばいたのでした。そのシモンにイエス様は決定的なことを宣言されるのです。47節と48節を共に読みましょう。「だから、言うておく。この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさで分かる。赦されることの少ない者は、愛することも少ない。」そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。」

この女性は、「罪の女であったもの」と口語訳聖書が語っているように、かつて、イエス様のお話し、罪の赦しについて聞いたことがあったのです。自分の罪がどのように醜いのか、深いのかを思い知らされ、律法によって裁かれ続けてきた人生、どこにも救いを見出

すことができなかつた。自分自身を責め続け、苦しみ的人生に、イエス様の言葉を聞いた。  
「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」(ルカ 5:31-32) リビングバイブルには、「わたしは、自分を正しいと思う人を招くためではなく、罪人を招いて、罪から離れさせるために来たのだ。」とあります。この女性は、神様から遣わされたお方、イエス様は罪人を招くために来られた。悔い改めに導くために、罪から離れさせるために来られたことを聞いて、イエス様を信じ、赦しを与えられたのだと思います。ですから、「罪の女であったもの」と口語訳聖書は記しています。

イエス様は、彼女に、「あなたの罪は赦された」と直接宣言されたのです。私たちにも、罪はあります。50万円なのか、500万円なのか、その罪の深さは違うでしょう。10個の物を盗んだ人は、1個盗んだ人より罪が深いのでしょうか。神様の前には1個も10個も盗みは盗みなのです。何よりも聖書は、私たちを愛し、私たちを創造された魂の親である神様を無視し、自分の人生から神様を追い出して、自分勝手に生きていたことを罪と言っています。イエス様は、そのような罪人、私たちを救うために、罪から離させるために来られたのです。私たちの罪を赦すために、罪のないきよいイエス様が身代わりに十字架にかかり、苦しみを受け、尊い血を流し、命を差し出して下さったのです。そのおかげで、私たちの罪が赦され、魂が救われ、イエス様が死んで、葬られ、よみがえられたことにより、私たちは死んでも生きる、永遠の命、天国の望みが与えられたのです。私たちは、そのことを感謝して受け入れたいと思うのです。

### Ⅲ 結論部

「同情するなら金をくれ」というセリフで有名になった「家なき子」というテレビドラマで、安達祐実という女優が、当時12歳で、主演をやり、彼女の出世作になりました。家庭内暴力を受けている小学生の少女が理不尽な環境の中でも、困難に負けずに生きていく様子を描いた物語です。悲惨な状況の中で、憐れんでも何もしてくれない大人に、「同情するなら金をくれ」というセリフが、とてもインパクトで有名になり、新語、流行語大賞に選ばれるほどでした。

神様は、罪ある私たちを同情されたお方でした。同情した、かわいそうにと、思っただけではなく、罪人を救うためにご自分の大切な独り子を差し出して下さったのです。神の愛がイエス様の十字架と復活を通して示されたのです。

イエス様の前に出た女性は、自分のどうしようもない人生に光を差し込んで下さったイエス様の姿を見て、ただただ、感謝の思いで一杯。感謝の涙がとめどもなく流れたのです。そして、自分にできる精一杯の事をしたのです。イエス様に多くの罪が赦されたからこそ、精一杯のことができたのでした。多く赦されたからこそ、多く愛することができたのです。私たちは、人と比べる必要もないくらいに、自分自身を見れば、罪深さがわかります。その私たちに向かって、「あなたの罪は赦された」とイエス様は宣言されるのです。

この大きな恵みに感謝して、この週も神様にも、隣人にも愛を示して歩みたいと思うのです。神様の愛と恵みをいただいたことを感謝して、この週を歩んでまいりましょう。